

「太平山麓九条の会」だより



事務局：須黒法律会計事務所 〒328-0027 栃木市今泉町2-4-18 FAX0282-22-3757
代表：齋藤昭俊 電話連絡先0282-22-7079(増田)
Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp HP：太平山麓九条の会で検索

130号
2018年2月23日発行

9条活かす 平和のつどい

3月31日(土) 13:30~15:30 栃木文化会館 大会議室

栃木市旭町 12-16 TEL0282-23-5678

井上ひさしさん

「9条を語る」DVD視聴



世界は9条の精神を
実現しようとしている

2010年4月に亡くなった井上ひさしさんが語った憲法9条を守ることの意味。改憲をねらう安倍政権、改めて憲法9条と戦争について広く考えてもらいたいとDVD化したものです。

安倍首相は「9条改憲」を公言し、9条一項、二項は残しつつ自衛隊を明文で書きこむ「加憲」という形での「9条改憲」に着手しようとしています。戦後70年以上にわたって、日本が海外で戦争してこなかった大きな力は憲法9条の存在と市民の粘り強い運動でした。13年前に発足した太平山麓九条の会、今その活動の真価が問われる時を迎えています。改憲の動きを阻止する行動に踏み出そうではありませんか。ひとり一人、何が出来るか、思いを語り、考えあいませんか。「9条を活かす 平和のつどい」にご参加ください。

スタンディングのお知らせ

安倍9条改憲阻止！ 3000万人署名！

3月9日(金) 栃木市役所前

3月19日(月) 栃木イオン・カワチ薬品前交差点

※午後3時～(約30分間)

「安倍9条改憲NO！3000万人署名」の横断幕を作りました。



2月9日 栃木市役所前
「安倍9条改憲NO！
3000万人署名」行動

カンパのお礼

多くの方からカンパをお寄せいただきました。ご協力ありがとうございました。

カンパは、毎月発行しているニュースをはじめ、宣伝行動など諸々の活動に使わせていただいています。改憲の危機のなか、力を合わせ今後も取組みを進めていきます。

「声を上げる」「ゆっくりいそげ」
■伊藤真氏の講演を聞いて■
今、政府は憲法9条を変え、戦争をできる国にしようとする動きを強めています。改憲を進めるために政府はことさら北朝鮮の脅威をあおり、そのため自衛隊を軍隊にし、武力で相手に脅威を与えることが必要という世論を作ろうとしています。それに対して、伊藤氏は、戦争の悲惨な現実を知る。相手の立場になって考えること。想像力を働かせることが求められると思います。
権力者は、巧みに国民を操ります。「我々は攻撃されかかっているのだ」と語る。大衆には一つ重要なことを何度も何度も言えいいなどの手法です。
では私たちはどうすればいいのでしょうか？自衛隊を憲法に明記する問題点をしっかりとつかむこと。自衛隊は軍隊になり、私たちの生活に軍が関わってくる、学校にも軍が入って来ることもある、軍事費が福祉などの費用を圧迫することなどを知ることだと。
国は私たちが創りあげるもの。憲法を知り、自立した市民としてそれぞれが主体的に行動すること。おかしいと気づいたものから声を上げることが大切と言います。(板橋記)

栃木県立美術館

「没後30年 鈴木賢二展」によせて

鈴木 解子



「署名」 1960年

前日の夕方、明日もスケッチを続けるつもりで父はペンを置いたはずだった・・・が、1987年11月15日の早朝に父は眠ったまま永久の眠りに入ってしまった。

あの日から30年、

いま栃木県立美術館で「没後30年 鈴木賢二展」が開催されている。スケッチ帳に向かう父の姿、作品と資料を整理する母の姿が明らかに蘇り、30年という時の経過が信じられない思いではある。

県立美術館の広い会場に父の写真が、資料や作品が、時代を追って“理路整然”と展示されている。それは親しんだ作品たちが、まるで初めて出会うもののように別の命を持ち、新たな役割をもって“其処に在る”のだ。

私は鈴木賢二の作品のどれも好きだ。戦前の彫刻家時代の子どもの姿を彫った木版画、精神性あふれるブロンズ像、戦後の版画運動時代の小品、益子

時代の賢二の手の大きさを感じさせる陶彫や手拭いを被った女たちの大小の木版画、東京・異人館時代の労働運動の中の作品・・・。

そのひとつ「署名」は1960年代初頭の失業対策事業打ち切り反対闘争の中の作品だ。この時代、賢二は失対事業に従事する労働者

の間で多くの作品を制作した。作品のそこそこには子どもがいる。「署名」の中心には子どもを背負ったペンを持つ母親の像。このペンの先にある名前に、ひとりの父親としての鈴木賢二の姿はつきりと浮かぶ。社会の底辺で生活に取り組む労働者、そこには守らなければならぬ子どもが、家族がいる。賢二の作品の基調はこれなのだ、と思う。

1965年、59歳で病に倒れた父は右半身の自由を失った。彫刻刀を左手に持ち替え、制作意欲は幼い日々の憧憬に向かつていき、やがて彫刻刀はスケッチ帳に草花を描くペんに替わった。母は

毎日まいにち、スケッチの画題をもとめて老人車を押して草花を探し歩いた。父は好きな花が机の前にそえられると「オーツ」と喜びの声を上げ、母はそれを楽しみにまた花をもとめた。こうして描かれた

「賢二とよしの花日記」は1000枚を超えているだろうか。その内の6点が会場の最後のコーナーに展示されている。そこは、二人に光が当たっているかのようにひととき明るい。

鈴木賢二は昭和のどの時代にあつても社会の底辺で生きる人々を描いた。没後30年を経たこの展覧会で、賢二とその作品が現代の市井の人々、昭和を知らない若い人たちに迎えられるとしたら、それは私にとつて望外の喜びだ。



(賢二・四女)

「すいせん」1983年

「鈴木賢二展」は県立美術館にて3月21日(水・祭)まで開催中

わたしの シリーズ(2)

おすすめ絵本

「しゅくだい」

いもとうようこ文・絵

本の力

(H・F)



小学校で読み聞かせをしています。子どもたちに読む本を選ぶ時、まずページをめくりながら次はどんなことが書いてあるのかしら？と、ワクワクする本にしています。「しゅくだい」はいろいろな意味で忘れられない一冊の本です。

・・・「やぎのめえこ先生が『今日の宿題はだっこです』おうちの人にだっこしてもらってください」・・・「しゅくだい」の本を読み終えてから、子どもたちにもこんなしゅくだいがでたら皆さんはどうですか？と質問する。すると一番前に座っていた男の子が手を真つ先に上げ、はっきりとした声で「僕はおうさんがいないんだ」と答えたのです。私はとつさに「お母さんにぎゅくしてもらってね、君は立派だよ」と答えになりました。ただ単純に心温まる本と思っただけの本。傷つけてしまったかと反省ですが、物事を深く考え強くお母さんを助け成長してほしいと思った出来事でした。